

Title	中国古代における山岳狩獵図の系譜とその風景の表現： 青銅器から画像磚へ
Author(s)	龔, 詩文
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44759
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	キョウ 翼	シ 詩	ブン 文
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 1 8 3 2 1 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻		
学 位 論 文 名	中国古代における山岳狩猟図の系譜とその風景の表現 —青銅器から画像磚へ—		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 藤 田 治 彦 (副査) 教 授 大 橋 良 介 教 授 上 倉 庸 敬 教 授 湯 浅 邦 弘		

論 文 内 容 の 要 旨

中国古代の芸術には、大自然を祭祀が行われる聖地とみなし、第二の自然としての神仙風庭園に不老不死の仙境を見、穏やかな田園のうちに桃源郷のような楽園を求める、当時の人々の自然観が窺える。このような自然観に基づいて、祭器としての青銅器において聖地での「神遊び」が祈念的に表され、博山炉などの器の上に庭園での「人間の遊」が象られ、墓室装飾では田園での「山水の遊」が再現的あるいは説明的に描かれた。これらが最終的に「臥遊山水」に結晶化されて、山水画が生まれることになったと推定される。本論は、古代中国における青銅器、博山炉などの器と、空心画像磚、画像石、壁画、画像磚などの墓室装飾を取り上げ、そこに表された山岳狩猟図と関連図像の風景表現をおもな考察の対象としている。本論の目的は、のちの山水画への展開を念頭において、それらの古代芸術において自然がどのように、また、どういう理由で表されたのか、また、その風景の表現は当時の人々に如何なる意味を持っていたのかを明らかにすることである。

序論では山岳狩猟図の系譜的展開と各時代の社会的状況について考察している。第一章では、戦国時代の青銅器に表された山岳狩猟図を取り上げ、その成立と性格を考察し、山岳・樹木などの自然物が祭祀の「道具」、自然空間が祭祀の「場」とされて山岳狩猟図が成立したことを論じている。第二章では、秦漢時代の器とくに博山炉に着目し、神仙思想の興隆と帝国の確立にともない狩猟のさまが徐々に聖地の祭祀から庭園の遊猟の表現へと移行していったこと、またそれに応じて祭祀用の青銅器上での平面的な装飾であった山岳狩猟図が、博山炉に見られるように容器それ自体に立体的に表現されるものへと移行していったことを論じている。第三章から第六章までは、漢代の墓室装飾を取り上げている。第三章では空心画像磚、第四章では画像石、第五章では壁画、第六章では画像磚に表された山岳狩猟図を取り上げ、その歴史的、地理的展開を辿り、そこに表された風景の表現を分析し、山岳狩猟図が如何にして田園農莊図を経て山水画へと至ったのかを辿っている。

儒教の国教化とともに、山岳狩猟図は再び祖先祭祀の枠組の中で登場する。とりわけ当時の儒教でもっとも重視されていた孝思想を表す墓室装飾としてそれは登場する。しかし、秦漢帝国の崩壊とともに儒教は衰退し、山岳狩猟図は儒教的画題の拘束力から解放された。また当時の人々が自然をそのままに描くことを重視したために、風景の表現は活性化され、多様な成果を生む。この変化がのちの山水画成立の契機となったのであり、山岳狩猟図は中国古代におけるもっとも重要な風景表現の画題であった。山岳狩猟図の成立から衰退までの過程を辿ることによって中国古代

の芸術に表された自然観が理解されるというのが本論の主張である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国古代の関連芸術作品を比較検討し、山岳狩獵図の系譜とその風景の表現の変遷を辿り、山岳狩獵図から山水画へという風景の表現の歴史的展開を示そうとしたものである。本研究には中国において主流をなす考古学的美術作品研究を越えて、新たな研究の可能性を探ろうとする意図が窺える。つまり青銅器、博山炉、墓室装飾などの研究には、考古学的な研究だけではなく、その制作を支える精神世界や、その造形や文様に表された芸術性などの研究も重要だという主張が込められている。

山水画の源流は画像紋にまで溯ることができ、それが四世紀の江南で成立したとするのは学界の定説と言えよう。しかし、この間つまり戦国から秦漢にかけて、その風景の表現を支えていたのは何か、画題は何か、表されたのはどのような場所か、どのように表現され、その表現が変化していった要因は何か、そして、以上の諸問題と山水画との関係はどのようなものかなどはまだ不明のままである。本論は山岳狩獵図に注目し、その成立から衰退までの過程を辿ることにより、以上の問題を解明する糸口の一つを見出している。

しかし本論文には論点が多過ぎる感があり、以上のような諸問題が十分統合的に扱われているとは言い難い。第一章では具体的かつ詳細に論じられているが、第二章以降は印象的説明が多い。また、第三章において重要な鄭州の空心画像磚は構図上第一章で論じられている作品に類似しており、同じ章で扱うことも可能であろう。他方、第四章の宗廟についての考察は重要で別の章を設けるべきかも知れないなど構成上の問題も残る。また、第五章で導入されている探勝的な風景という概念には、人間との関連が本当に密接であったか否か不明であり、保留が必要だろう。臥遊山水と成都タイプについての考察は興味深い。

山水の遊についての論述は自然に対する人間の姿勢についての考察であり、今後一層追及されるべき方向であろう。古代の作品には老荘思想に基いた美的表現が窺えるが、初期の山水画は殆ど現存しないので、代わりに墓室装飾に見られる風景の表現に基づいて山水画の源流を探求するという方法がとられた。山岳狩獵図の成立、変貌、展開、衰退といった過程を辿ることで中国古代の芸術に表された自然観が理解され、山水画成立への道筋も体系的に捉えることができるという主張のかなりの部分は本論で示され、その構想の大きさは評価に値する。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。